これからも「毎日が発見」とご一緒に。

MAI-HATSU

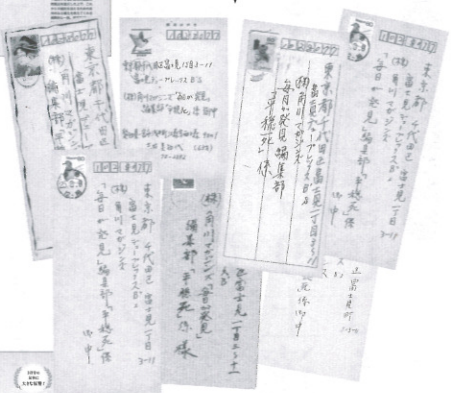
みなさまの発見が次の発見へ。誌面でどんどんつながっていきます。

みなさんの発見、ご意見を、雑誌作りにどんどん生かしていきます。誌面で取り上げた企画にさらなるみなさんの発見が生まれ、それをもとに、また新しい発見、企画となっていく。読者どうしの発見も、誌面のなかでどんどんつながっていきます。そんな2つの例をご紹介しましょう。

「平穏死」についての記事には読者からさまざまな反響が。すぐにまた、その声を記事にしました。

2013年の3月号で、在宅医療で700人以上を看取った経験をもつ医師、長尾和宏先生のお話を通し、理想の最期の迎え方、「平穏死」を取り上げました。この記事には、予想以上にたくさんの読者のお手紙をいただき、そのお手紙を元に、またさっそく再度、平穏死を考える記事を掲載。ご家族を見送られたときの体験や、自分自身はこう最期を迎えたいというみなさんの真剣なお手紙が、いっそう深く、人生の最期のあり方を考えるきっかけになりました。誌面ではみなさんのご意見をできるだけ取り上げ、またつなげていきたいと思います。

最初に載った「平穏死」の記事（2013年3月号）



たくさんのお手紙をいただきました

読者のお手紙で構成した2回目の「平穏死」の記事（2013年7月号）

紹介した手紙のひとつ

家に帰りたがった主人が今でも目に浮かびます

福岡県糟屋郡　小村佐喜子さん（83歳）

平穏死、よくぞ取り上げてくださいました。今から25年前、主人をがんで失いました。体中に管をつけられ、最期はモルヒネを打つだけでした。本人の意思がはっきりしていたとき、とても家に帰りたがりましたが、治療ができないからだめと言われ、見ているのがつらかったです。きっと私を恨んでいたと思います。その姿が今でも目に浮かび、涙が出ます。

主人の死後、私はすぐ日本尊厳死協会に入りました。そしてまだ何かできることはないかと考え、せっかく生きてきたんだから医学の役に立ちたいと、献体を申し込みました。子どもたちの承認を得るのに、半年かかりましたが…。